

「“増える”はたし算じゃないの？」

～授業力向上に向けて～

6月10日（水）、今年度最初の校内授業研究会を行いました。子ども一人一人に質の高い学びを提供する基礎となるのは、授業です。日々この授業を司る私も教職員一人一人の授業力向上のため、職員で一人の提案授業を観察し、子どもたちの発言やつぶやきをもとに、授業記録をとって授業を分析し、各自の授業改善に活かすことがねらいです。参観した授業は、2年生の算数で、子どもたちが下校した後、協議を行いました。

授業のはじめの場面、先生が、「先生も、みんなと同じようにシールを集めています」と言いながら、シールを貼った台紙を、枚数が見えないように裏返して提示します。子どもたちの間で、シール集めが流行っているようで、先生のこの投げかけに、子どもたちは大いに興味を持ち、「20枚?」「30枚?」と枚数を当てようとしています。

そこで、先生が、次のようなヒントを出しました。「校長先生が、シールをプレゼントしてくれました。もらった9枚を合わせたら30枚になりました」。子どもたちから「そういうことか・・・」「じゃあ、21ってこと?・・・」というつぶやきが聞こえてきます。

ここで、先生が改めて問題文を提示します。

シールをもっていました。
9まいもらったので、
30まいになりました。
はじめは、なんまいありましたか。

2年生は1年生の時に、「あわせて」「ふえると」等の言葉に着目して、たし算の学習をしてきています。

ところが、この問題は、「もらう」というたし算を連想させる言葉があり、これまで通りの“ $9+30$ ”といきたいところですが、そうはいきません。9はもらう数ですが、30は足された結果です。ですから、たし算の逆思考が求められます。子どもたちは、なんとなくはわかるのですが、その立式の根拠をみんなにわかるように、筋道を立てて説明する必要があるのです。

授業中盤、ひき算をした理由を発言する中で、「逆に、 $30+9$ をすると39になる」と、はじめの数が全部の数より増えてしまうおかしさに気づく子が出てきました。

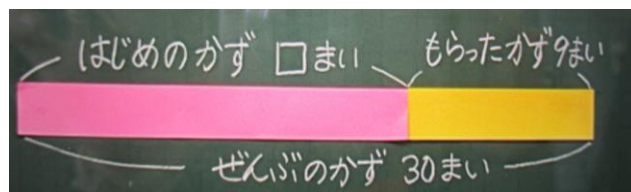
そこで、先生が、「9枚もらったんですよね。もらったら増えますよね。“ふえる”はたし算ですよ。だから、 $30+9=39$ じゃないかな」と、子どもたちを揺さぶります。

すると、「でもさ、シールをもらって9枚増えて全部で30枚だから」「さいしょの数はわからなくて、全部で30枚だから39枚にならない」「増えるけど、30枚は全部の数」と、子どもたちは先生を納得させようと必死です。



でも、先生は、「まだ納得できないなあ・・・」。そして、「みんなは、何をもとに考えたのかな?」と、考えの根拠を明らかにするように促します。

すると、一人の子が黒板に貼ってあるテープ図を操作し、全体の30枚を示すテープから9枚のテープの部分をどけるとはじめの数がわかることを説明してくれました。他の子どもたちもテープ操作に同意。先生もテープ操作の説明から、やっとひき算【 $30-9=21$ 】に、納得したのでした。



この授業の生産点として、

- 子どもたちに身近な“シール”が取り上げられ、枚数が見えないように裏返した台紙を見せることから始まった授業。「解いてみたい!」という子どもたちの意欲が大いに沸くものとなりました。
- 式と答えは、どの子も正答をすぐに見つけ出せていました。しかし、ただ単に正答を見つければよいとするのではなく、式を導くまでの考え方が大事であり、教師の巧みな授業の進め方で、子どもたちはテープ図に目をやり、立式の根拠を明確にすることができたようです。
- この時間は、授業者の想定通り、子どもたち対先生という構図がつくられ、子どもたちが先生を説得し、懸命に解決を図ろうとする姿もありました。

教職員にとって、授業の組み立てや子どもへの投げかけ、丁寧な準備物等、大いに勉強となる授業となりました。